

イエスは「病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい」と12弟子に言い渡し、宣教者として、初めて彼らを世に送り出しました。病気や死や悪霊といった言葉は、その人の生命力をもぎ取ってしまうような力のことを言い表しています。つまりイエスは、明日を生きる力を奪われた人々が再び立ち上がれるように、弟子達を派遣したということでしょう。とは言え、弟子達は医者ではないので、人をいやすだけの専門知識や技術を持っていた訳ではありません。また、イエスは、旅に「金貨も銀貨も銅貨も…袋も、二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない」と言い渡しています。万事休す。これで、人を支える術は全て無くなったかのように見えます。しかしどうもイエスがここで求めているのは、物理的な支援のことではないようです。生きる力を失った人々を立ち上がらせるために、弟子達に求めたのは「平和があるように」との挨拶でした。この「挨拶」という言葉は、原語で「抱擁する」という意味があります。つまりイエスは、弟子達に、相手の痛み、苦しみを抱きとめるようにして、神の「平和」を祈り求めよと勧めたのでした。

日雇い労働者の街、大阪の釜ヶ崎でおにぎりを配るボランティアをしていたことがあります。楽しさ、心地よさを感じていました。目に見えて、相手の必要を満たしていると実感できたからでしょう。では、おにぎりを受け取る側の気持ちはどうなのか…。「多くの方が、自分もいつかおにぎりを配る側に立ちたいと願っている」、長年釜ヶ崎に住む本田哲郎神父の言葉です。「おにぎり」を渡して、どこか満足気になっていた自分が恥ずかしくなりました。与える側の心地良さに安住し、相手の思いを真剣に汲み取ろうとしていなかったように思います。「人はパンだけで生きるものではない」(4:4)とのイエスの言葉が、新たな響きを持って迫ってきました。

何も持たない弟子達の派遣。それは、彼らが与え手である前に、受け手であることを学ばせるための、イエスが用意された旅路であったのかもしれませんが。目に見えて与えるものがない無力さを抱えながら、ただただ「平和があるように」と神の憐れみを祈り、相手の気持ちを受け取りながら、そこに寄り添うしかなかった…しかし、そのようなかわりのなかでこそ、神から「ただで」授かっている、人をいやす賜物(1節)が発揮され、真の与え手に変えられていく不思議さに出会っていったのだと思います。その神の起こす不思議な出来事をこそ、弟子達は、福音書記者マタイは証してきたし、私達も証していくことになるのです。

(文責：望月達朗牧師)

